

外国語活動・外国語

「ことば」や文化への理解を深め
コミュニケーションを豊かに創る子



外国語活動・外国語科

「ことば」や文化への理解を深めコミュニケーションを豊かに創る子

中村 香

コロナ禍後、日本国内でも加速的にグローバル化が進んでいる。訪日外国人数も在留外国人数も、国の予想を超えて増加している。10年後、少子高齢化とともに労働人口が減少する日本において、日本語を母語としない在留外国人との共生が今以上に求められることは想像に難くない。さらに、地球規模の課題と生成AIの目覚ましい進化が複雑に絡み合っている今、外国語教育ですべきことは何だろうか。そこで本校外国語部では、「ことば」やその背景にある自他文化について興味をもって理解を深めることを大切にしながら、言語の知識だけでなく様々な場面や目的に応じてコミュニケーションを豊かに創れる子の育成を目指す。

外国語

1. 外国語活動・外国語科の研究テーマ

(1) 現代的な課題・問題意識など

令和6年の訪日外国人数は3,687万人（国土交通省）、令和6年6月末の在留外国人は約395万人（出入国在留管理庁）に達し、コロナ禍後、日本国内でもグローバル化が加速している。さらに、パンデミックや気候変動による甚大な自然災害、不安定な国際情勢、深刻な少子高齢化、生成AIをはじめとするデジタル技術の急速な進展などにより、予測困難なVUCAな時代に対応できる人材育成が求められている。特に教育現場では、異なる価値観を持つ多様な他者と当事者意識をもって対話し、問題を発見・解決できる「持続可能な社会の創り手」を育成する必要性が、これまで以上に高まっている（中央教育審議会、2025）。加えて、生成AIの進歩により、誰もが容易に母語から英語へ翻訳したり、音声発話を機械に代替させたりできるようになった現在、外国語を学ぶ意義について、指導者も子供も再考する必要がある（文部科学省、2025）。

近年、子供たちは日常生活でSNSやゲーム、動画視聴など、一方的な情報の発信・受信に多くの時間を費やすようになり、家族や友人との対面でのコミュニケーションは減少している。この傾向により、母語での対面コミュニケーション能力の低下が懸念されている。しかしながら、日本国内では多国籍化・多文化化・多言語化が進み、異文化間コミュニケーションの重要性は高まっている。こうした背景から、小学校の外国語教育は、外国語のみならず母語も含めたコミュニケーション力を育成する一端を担いつつ、単なる言語知識習得にとどまらず、「共生社会の実現に必要な国際コミュニケーション能力や、異なる文化・言語をもつ人々と心を開いて主体的に関わろうとする態度を身につけたグローバル人材の育成」（文部科学省、2017）を視野に入れた教育が求められている。

(2) テーマ設定の理由

外国語活動・外国語科の研究のテーマは、昨年度に引き続き「『ことば』や文化への理解を深め、豊かなコミュニケーションを創る子」である。ここでいう「ことば」は、単なる語彙や文法に限定されず、ストーリーや歌詞、さらには子供自身の思考や感情を表現する言語活動全般を含む広義の概念である。具体的には、以下の要素を含む。

- 子供が発話する英語（未完成な発音を含む）
- 意図を伝えるためのジェスチャーや表情など非言語的要素
- 聞き取った英語をカタカナで表記する試み
- 英語理解を補助する日本語

過去の実践研究により、外国語学習は英語のみで完結するものではなく、日本語による思考との連動が不可欠である

ことが示されている。したがって、外国語教育は、外国語・外国文化と自国語・自国文化への理解を深め、多文化社会における共生を可能にする「受容の態度」と、異文化の人々に自分自身や自国を主体的に伝える「自己表現の姿勢」を涵養することを目的とする。

① 「ことば」や文化への理解を深めるとは

「ことば」への理解とは、語彙や発音、文法といった表面的な部分の理解だけではなく、日本語の思考や認知能力が伴ったものである必要がある。そうでなければ、実際に自分の「ことば」として活用していくことができない。これは、下図1. カミンズの「第二言語能力の氷山説」にあるように、二つの言語は語彙や文法、文字や発音など表面的な部分にそれぞれ独自の特徴があるため、独立して存在しているように見えるが、実は二つの言語は思考や認知など深い部分において共通していることを示している。それが、Common Underlying Proficiency（共通基底能力）であり、第二言語能力は全く異なる言語を習得しているのではなく、言語習得の中で共通する能力（思考や認知）であり日本語で獲得した概念や思考が第二言語を理解したり獲得したりする時に応用されるという考えである。だからこそ、日本語の言語能力を考慮した外国語活動が求められる。次に、文化とは、下図2. ホールの「異文化理解の氷山モデル」が示すように、「目に見える表層文化」と「目に見えない深層文化」とがあることを示している。表層文化とは、言語や習慣、儀式といった明白で目に見えるものである。一方、深層文化とは、価値観や信念、暗黙のコミュニケーションといった目に見えない、同一文化内において暗黙的な側面のことを表している。また、表層文化は、その文化のごく一部にすぎず、深層文化の方がはるかに多くの部分を担っている。つまり、異文化を理解するには言語だけでは理解しきれないものが多くある。だからこそ、外国語において、Tokyo Global Gateway での English Speaker との英語体験や留学生との交流体験といった本物の言語活動が重要となってくる。これらの体験的な言語活動を通して、言語だけではなく他者の価値観や信念も含めてコミュニケーションをする必要があることを学べるからだ。

② コミュニケーションを豊かに創る子とは

外国語における言語活動を通して、「ことば」や文化を理解していく姿の中には、外国語や外国の文化だけでなく、日本語や自国文化への再認識も行われると考えている。さらに、特に国際共通語としての英語を、母語やこれまでの言語経験を活かしながらコミュニケーションをするための「ことば」として獲得していくことを通して、自分なりのコミュニケーションをする時の幅や奥行きを創っていく子をめざす。例えば、自己紹介をする際に、どの英語表現を使って、どの順番に、どんな表情や、視覚的資料を用いて伝えるのか、個々の思いや英語力に合わせて異なったものになって当然であるという前提を授業者がもつ必要がある。さらに、個々の英語での自己紹介が、子供自身がめざすものしていこうとする姿が、豊かにコミュニケーションを創っていく子と考える。

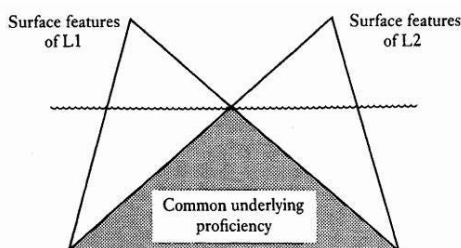


図1. カミンズの「第二言語能力の氷山説」
(Cummins & Swain, 1986, p83)

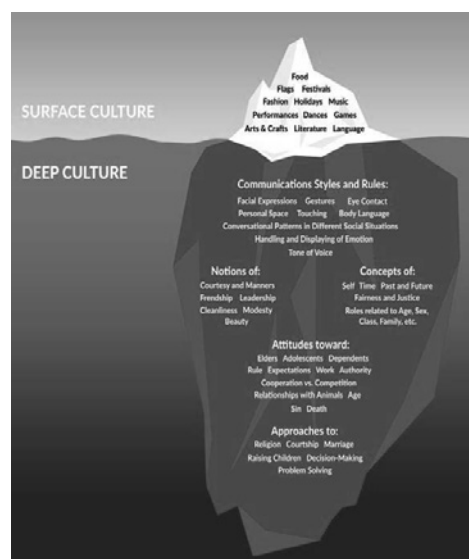


図2. ホールの「異文化理解の氷山モデル」

2. 全体研究テーマとの関連

(1) 外国語活動・外国語科の本質の吟味

全体研究テーマ「学びを創る子－一人一人が本質を味わう授業づくり－」を受けて、本校における外国語活動・外国語の本質について、学習指導要領におけるコミュニケーションの見方・考え方と第二言語習得理論および異文化理解の観点から、再検討した。

① 本質Ⅰ (個別知識・技能を統合・包括する鍵概念)

本校の外国語活動・外国語科では、「ことば」や文化への理解を深めることが、異なる文化背景をもった人と人とのコミュニケーションを図る場で適切にコミュニケーションすることに繋がっていくと考える。さらにこれは、相手に対する配慮や様々な言語や文化を尊重する態度を養うだけでなく、地球的課題解決に向けて考え行動していく人材の育成をも目指すものである。つまり、文化理解、コミュニケーションの先にはグローバルシチズンシップ（地球市民性）を育むことに繋がっている。このことは、細川ら（2016）も、言語教育の重要な使命として市民性形成を主張している。そこでは、混迷する社会において価値観の異なる多様な他者と関わる際、言葉を使って自分を表現しつつ相手を理解し、共により良い社会を築くための意識改革が必要だと述べている。また、それは一人ひとりが言語活動の主体として、自らの社会をどのように形づくるのか、つまり市民としてどのような言語活動の姿勢が求められるのかという課題に向き合うことだと指摘している。

上記の検討の結果、本校の外国語活動・外国語科では、本質Ⅰはグローバルシチズンシップ（地球市民性）を大きな概念とし、下位概念として文化理解とコミュニケーションと捉える。また、このグローバルシチズンシップ（地球市民性）と文化理解及びコミュニケーションは相互に作用し合う。子供が日本語で異文化理解を深めることで、その子供の視野や価値観などに変化が起き、その子供自身のグローバルシチズンシップ（地球市民性）にも影響が及ぶと同時に、子供のグローバルシチズンシップが異文化理解やコミュニケーションの概念にも影響をするからである。

② 本質Ⅱ (その教科等ならではの認識・表現の方法)

本質Ⅱは、学習指導要領では4技能「聞くこと、読むこと、話すこと（伝えること、発表）、書くこと」で表されているが、実際のコミュニケーションでは、4技能の言語能力だけでなく、社会的言語使用能力、談話能力、方略的言語使用能力といった言語運用能力が必要となる。そこで、本質Ⅱは、言語能力と言語運用能力の3領域で捉え直した。なお、言語運用能力は、母語の能力とも密接に関係する。それぞれの領域について、以下に説明する。

社会的言語使用能力：相手や場に応じて表現や伝達方法を選び調整する

談話能力：文脈を踏まえて内容にあった会話を続ける

方略的言語使用能力：コミュニケーションの目的を達成するための対処能力

この言語運用能力を学習指導要領のことばであらわすならば、「コミュニケーションの目的や場面、状況等に応じて、情報を整理しながら考えなどを形成し、再構築する能力」（文部科学省、2017）である。

本質Ⅰ	本質Ⅱ
グローバルシチズンシップ（地球市民性）> - 文化理解 - コミュニケーション	<div style="display: flex; align-items: center; justify-content: center;"> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> 言語能力 （聞く、話す、読む、書く） </div> <div style="margin: 0 10px;">+</div> <div style="border: 1px solid black; padding: 5px; text-align: center;"> 言語運用能力 - 社会的言語使用能力 - 談話能力 - 方略的言語使用能力 </div> </div>

(2) 一人一人が本質を味わう学びのプロセス（省察的課題への支援）

① 包括的かつ個別的な課題設定

外国語学習初心者の子供が、限られた授業時間の中で全ての単元で言語活動（アウトプット）できるようになるのは簡単ではない。そのためこれまで、単元最後の言語活動に向けてターゲットフレーズを何度も聞いたり言ったりすることを繰り返し、ターゲット表現の一部分の英単語だけを変えてやり取りするという授業をよく見てきた。このようなパターン化した授業で、子供は自分の伝えたいことを英語で表現できているのだろうか。

そこで、包括的かつ個別的な課題設定の一つとして、子供が表現できる英語表現に幅をもたせることを挙げる。具体的には、全ての単元でのアウトプットに捕らわれずに、複数単元を学習しある程度の言語材料を蓄えた中でアウトプットを目指すことや、プロジェクト学習として留学生との交流、異学年との交流での言語活動を通して、伝えたい事柄が

多様になっていく。例えば、「留学生との交流活動で、留学生に日本のことを紹介しよう」という目的に向けて学習する際には、この目的が、留学生と交流する子供たち全員にとって包括的な課題設定であると同時に、個々の子供は、日本の何について、どんな風に、どんな英語を使って紹介したらよいかという、個別的な課題について取り組むことになる。日本の紹介としては、生活科で学んだ日本の遊び、社会科での町たんけんや日本各地の特産物や地理、家庭科で学んだ日本の食など、様々に関連付けることができる。さらに、言語活動への目的意識を高め持続させるために、外国語活動・外国語の授業時間以外での学びも視野に入れて考えることもできる。具体的には、地球規模の課題や SDGs の視点、教科横断的な視点も含め、担任や他の専科教員との連携やカリキュラムマネジメントなどである。そうすることで、英語に苦手意識をもっている子供にも、英語以外の分野から目的意識をもつことが可能となる。さらには、単元におけるコミュニケーションの場も、包括的かつ個別的な課題場面となる。

②多様な解決過程を支援する学習環境

これまで、外国語活動や外国語の授業では一斉授業が中心となっていた。勿論、一斉授業が必要な場面もあるが、子供が主体的に学びを創れるように、複数の学び方の中から自分で選べる学習環境を設定する。例えば、学習のツールを選択できるように、これまでの既習事項や学習経験、デジタル教科書やピクチャーディクショナリー、児童同士の学び合い、教員への質問、AI との会話練習、動画撮影などを提示する。学習ツールの選択だけでなく、どの順番でどのツールを実行するかを決めることで、課題解決のプロセスを子供自身が考え実行することになる。そうすることで、子供自身が課題解決に向けて学び方をも試行錯誤しながら英語表現や非言語表現を考えていくことを期待している。また、ペアワークやグループワークなどの多様な学習形態も課題解決を支援する学習環境として捉えている。

③解決過程への批判的な振り返り

話すことや聞く活動を中心とした外国語の学びにおいて、日本語による振り返りは、自身の学び方を振り返るだけでなく学びのメタ認知をする場としても重要である。なぜなら、話すことや聞く活動では、学びの軌跡を可視化しづらく、自身の学びを振り返ったり積み重ねたりすることが疎かになりやすいからである。そこで、学びを母語で言語化したり、動画を撮影したものを見返して自身の学びを批判的に振り返ったりすることで、良くできているところやより良くするための課題を見つけることもできる。また、どのようなプロセスで課題を解決したかを振り返ることで、自身に合った学び方を学ぶ機会にもなる。さらに、個々の学びの振り返りだけでなく、ICT を活用し個々の振り返りを共有することで、お互いの学びを比べたり、参考にしたりすることが容易となる。

3. 成果と課題

本年度の成果として二つ挙げる。一つは、包括的かつ個別的な課題設定を意識することで、以前より子供が伝えたいことを英語で表現できる幅ができ、子供の英語表現が多様になったことである。もう一つは、多様な解決過程を支援する学習環境として、複数の学習ツールを示し子供が自分の学びに必要な学習ツールを自分自身で選んで学習することに挑戦し、子供が自分なりの学びを創る姿が見られたことである。これまで一斉教授の授業が多い外国語科の授業で、子供がそれぞれに違う学び方を選んで学んでいくことができたことは大きな成果である。その一方で、教師の働きかけや効果的な支援については、実践を重ねる中で省察的に検討していく余地が残った。また、自分に合った学び方を選んで学んでいくことがスムーズにできない子供もいた。子供が自分に合った学び方を選んで学んでいけるようになるには、このような学習経験を積み重ねていくことと、その学習を振り返る、解決過程への批判的な振り返りを充実させることが必要だろう。今回の成果と課題を基に、子供の学びをより充実させることを目指した実践研究を進めていく。

【引用・参考文献】・図2:出典 <https://bccie.bc.ca/wp-content/uploads/2020/09/cultural-iceberg.pdf>

・国土交通省(2024)「訪日外国人旅行者数・出国日本人数」https://www.mlit.go.jp/kankoch/tokei_hakusyo/shutsunyukokushasu.html

・出入国在留管理庁(2024)「令和7年6月末現在における在留外国人数について」https://www.moj.go.jp/isa/publications/press/13_00057.html

・細川英雄、尾辻恵美、マルチェッラ・マリ奥特ティ(編)(2016)『市民形成とことばの教育—母語・第二言語・外国語を超えて—』くろしお出版

・文部科学省(2025)教育課程部会外国語ワーキンググループ(資料Ⅰ)「AI時代に外国語を学ぶ本質的意義」・「英語運用能力に関する社会全体の課題と学校教育における対応の方向性」について https://www.mext.go.jp/content/20251030-mxt_kyoiku01-000045617_003.pdf

・文部科学省(2017)「小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語」(平成29年度告示)」

・Cummins, J. & Swain, M. (1986). Bilingualism in Education: Aspects of theory, research and practice. London, UK.: Longman.

・中央教育審議会(2024)「教育課程企画特別部会 論点整理」https://www.mext.go.jp/content/20250925-mxt_kyoiku02-000045057_01.pdf

子供が学びのツールを選んで学びのプロセスを創る

－第5学年「自己紹介！－お互いの魅力再発見－」を通して－

中村 香

1. 実践のポイント

全体テーマに「子供が学びを創る」を掲げているが、小学校の外国語の授業では、外国語の学習初心者ということで教師が主導で教える授業が一般的とされてきた。現在でも、一斉授業の中でターゲットとなる英語表現をインプットし、言語活動の設定を工夫しスモールステップで会話のやり取りを重ねながら、子供がターゲット表現を習得していく授業をよく見る。しかし、このような教師主導形式では、「子供が学びを創る」授業はイメージしづらい。

そこで本実践は、子供が目的意識をもって複数の方法の中から学び方を選び、子供が学習を進め、学びを創る授業に挑戦した。5年生の1学期は、外国語科をスタートさせるにあたり、英語での自己紹介をテーマに学ぶことが多い。本校でも、Unit1「自分の名前やスペル、好きなもの」、Unit2「誕生日や誕生日に欲しいもの」、Unit3「できることやとくいなこと」と自己紹介を扱う。そこで、これまでに習った既習表現を用いて、お互いの魅力を再発見できるように自己紹介をする単元を設定した。自分の自己紹介をより良くするための学びのツールを、子供自身が選んで学習する場面を設けた。その結果、一斉授業では気づかなかった子供たちが学びを創る姿を見ることができた。

2. 研究テーマとの関連

(1) 本単元で味わう外国語科の本質

①本質Ⅰ(個別知識・技能を統合・包括する鍵概念)

本単元における本質Ⅰは、英語でのコミュニケーションの楽しさを味わうことである。外国語科を学び始めて間もない子どもたちにとって、英語で自己紹介をし合い、自分のことを相手に伝えられる喜びや、相手のことを知る楽しさを味わうことが、その後のコミュニケーションの概念や文化理解につながる土台となると考える。

②本質Ⅱ(その教科等ならではの認識・表現の方法)

本単元における本質Ⅱは、言語能力として自己紹介に必要な英語表現を理解し聞いたり話したりできることと、言語運用能力として、相手や場に応じて表現や伝達方法を選んで調整する社会的使用能力、文脈を踏まえて内容にあった会話を続ける能力、コミュニケーションの目的を達成するための方略的使用能力の3つである。

(2) 一人一人の子供が本質を味わう学びのプロセス(省察的課題への支援)

①包括的かつ個別的な課題設定

本単元では、「自分のことを伝え、相手のことをよく知るために、よりよい自己紹介をしよう」と課題を提示することで、同じ目的意識をもちながらも、個々の自己紹介をよりよくしたいという個別的な課題設定とした。

②多様な解決過程を支援する学習環境

本単元では、学びのツールとして、㉗友達とのやり取り、㉘スクールAIで自己紹介のやり取り、㉙動画を撮影で何度も撮り直しをしながら練習、㉚デジタル教科書やピクチャーディクショナリーの音声を確認しながら練習、㉛先生とのやり取りを示した。授業の中で、子供が学びのツールを選び学びのプロセスを創っていく場を設ける。

③解決過程への批判的な振り返り

教科理論にも述べたが、外国語の学習において母語による振り返りは、自身の学びを言語化することで自身の学びをメタ認知することになるとともに、学びを記録し可視化することができる。可視化した学びは、振り返ることが容易になり、学びを積み重ねやすくなる。また、ICTを活用し、スクールAIからのフィードバックや友達からのフィードバック、動画を見返すことでの振り返りも、批判的な振り返りの機会にもなる。

3. 実践の実際

(1) ねらい

お互いの魅力を発見できるように、既習表現 (I'm / My birthday is / I want/ I like/ My favorite) やターゲット表現(I can)を用いて、自己紹介の内容を考え、お互いに工夫して伝え合うことができる。

(2) 授業の分析・考察

本実践での核は、子供たちが学習ツールを自分で選び、よりよい自己紹介にするために学ぶ場面である。授業では、自分で学習めあてを立て、そのめあてを達成するためにふさわしいと思う学習ツールを子供が選んだ。

実際の授業では、スクール AIⁱを導入して間もないこともあり、スクール AI を相手に自己紹介の練習をする子供 (写真1) も多くいたが、前時までに考えた自己紹介の内容を一人で考える子供 (写真2)、近くの友達と相談しながら英語表現を考える子供 (写真3)、友達と自己紹介をし合ってお互いにアドバイスする子供 (写真4) など、様々な学ぶ姿が見られた。また、振り返りでは、自分の自己紹介の英語表現を増やせたこと、伝える内容や順番を改善したこと、英語で自己紹介するときの発音や話すスピードを工夫できたこと、ジェスチャーや相槌の大切さに気付いたことなど、その子供なりにめあてにたいしての学びがあったことが書かれていた。中には、「今日はスクール AI と練習したので、次は友達と本当の自己紹介をしてみたい。」と書いている子供もいた。これは、自分の選んだ学び方を振り返って、別の学び方でも学びたいという、自己調整をしている姿と捉えることができる。教師は、子供が学んでいる姿を見守り励ましの声掛けをしたり、質問に答えたり、自分でめあてを立てて学習を進めることが中々できていない子供の支援を行った。このような学びを積み重ねることで、学び方を学ぶことになる。

4. まとめ

英語での自己紹介は、これから先も様々な場面で実際に行う機会があり、またその自己紹介の内容も、場面や個人の英語力や生活状況など、その時の文脈によって異なったものになる。今回は、外国語科の学習を始めて間もない5年生ということで、名前、誕生日、好きなこと・もの、得意なこと、できることなど、既習表現とターゲット表現を活用して、自己紹介をした。それが、包括的で個人的な課題となって上手く機能し、協働的かつ個別的な学びが創られた。また、多様な課題解決過程を支援する学習環境である、①学級全体で単元の見通しやねらい、学習ツールの提示、②個々の課題解決過程を記録するワークシート、③課題解決する時間の確保により、子供の様々な学びの姿が見られたことも成果といえる。ワークシートでは、授業ごとのめあてや振り返りをし、子供が自分の学習を振り返りその後の学びにつなげることを狙ったが、一部の子供には効果的であったが、十分に機能していないケースもあった。また、自分の学びに合った学習ツールを適切に選ぶには、経験の積み重ねが必要である。その一方で、子供がそれぞれに課題解決を行っている際の教師の支援の在り方には課題が残った。どのように、様々な子供の学びを見取り、支援が必要な子供に適切に対応できるようにできるか、今後の実践を通して探っていきたい。



写真1



写真2



写真3



写真4

ⁱ スクール AI とは、みんなぐが提供している教育特化型の生成 AI 活用 platform で、外国語科では6月より英会話アプリを活用している。